http://grimreaper.is-mine.net/

# スカイ・ロア
# Sky Roar

著：えむ

http://grimreaper.is-mine.net/

# 一、残光

夕闇が迫る藍色の空を、白が横切った。
やや細長い菱形流線型の機体。その機尾から伸びる六枚のフォトン翼で空を弾き、光の尾を残して飛行する。
爆裂的な速度で空中を駆け抜けるこの機体、〈MADO／frame - first〉は最強の戦闘兵器である。
機体は全部で十機。それぞれが個別性能に特化した一点物（ワンオフ）。その速度は風を置き去りにし、内包する火力は単騎にて敵の全てを屠り、正確無比の高速演算にて行動を瞬決する。有するスペックは他の追随を許さない。
その内の一つ、七番機ブラン・エフェメラル。
光沢の無い白で埋め尽くされたシリーズ最速の機体は、飛び続けることで自身に与えられた存在意義を体現し、文字通り他の追随を許さない。
最高速で飛び続けた。
完全に振り切った。
追跡できる訳がない。

――しかし、それはもう、過去の話だった。

突如として凄まじい炸裂音が鳴り響き、空に激震が走った。
虚空より飛来したクラスターミサイルの弾頭が炸裂。撒き散らされた小型の爆弾が破裂。連鎖爆発で相乗された火力が夕闇を照らし、一部空間が紅蓮で埋め尽くされる。
ブラン・エフェメラルを照準した爆撃だということは明らかだった。
だが、爆炎は、白には届かない。高速の七番機はクラスターミサイルの飛来を視認した直後、一瞬のうちに安全圏まで逃れていた。そのままホバリング状態を保持。機体にぐるりと帯状に埋め込まれた複数のナノカメラ・アイで後方の映像を捉える。
風で薄れていく黒煙。その隙間から覗く深い深い黒。
視える。
黒銀が。黒銀の人型機体が。
追い付かれていた事に驚く暇など無かった。黒銀機体の次の挙動が始まる。

http://grimreaper.is-mine.net/

高速飛行時の映像を見落とすことなく捉えるブラン・エフェメラルの動体視力はあらゆる瞬間を見極める。黒銀機体がランチャーから再び射出されたクラスターミサイルが炸裂する、その刹那でさえも。

白が動く。六枚翼が空を弾く。光の尾を横に薙ぎ、機体が旋回。通り過ぎていく爆風を紙一重で躱し、一足に数十メートルの距離を開け、続けざまに殺到する弾幕すらも躱して躱して潜り抜ける。そして一瞬にして相手の懐に潜り込んだ。

ここが領域。

――斬る。

ブラン・エフェメラルが有する明確な個別兵装は、遠距離系で言えば小型電磁加速ユニットによるレールガンのみ。その唯一の武装でさえも牽制的な使用しかしない。

斬撃による接近戦を得意とする白い機体は、単なる機動力であるはずのフォトン翼を、まるで刀のように振り抜く。高エネルギーで出力される強靭な刃を。

一閃。

か細い。しかし鋭い斬撃音が木霊する。

すれ違いざまに振り抜いた刃が金属を切裂き、標的を撃墜したのだ。――だが、墜ちたのは白い機体の方だった。

断線した内部回路がショートし、電光を撒き散らす。

数百もの斬撃をまともに受けてしまった機体は規定の耐久限界を超え、システムフリーズ。

斬撃音は一つであったはずだ。見落とす訳がない。見逃す訳もないはずだった。

――有り、得ない……！

機動力であるフォトンの噴射口を潰され、ブラン・エフェメラルは夕闇の中を墜落する。

複数のナノカメラ・アイが捉える黒銀の人型機体〈MADO／frame - next〉。

〈MADO／frame - first〉の正統後続機シリーズであるその機体は、腕甲から出力したフォトン刃を振り払い、墜ちゆく最強の先代を見下ろしながら言った。

『あんたらの伝説は、既に過去なんだよ』

他の追随を許さない。最強の機体シリーズ〈MADO／frame - first〉。

しかし、それはもう――――

http://grimreaper.is-mine.net/

過去の話なのだ。

少年は空を見上げていた。
ぽつぽつと星が顔を出し始めている。
夜闇が迫るこの時分でもハッキリと星を視とめることができるのは、空気が澄んでいるせいだ。
かつて空を狭めていた高層ビル群は、崩れ去って廃墟となった。
かつて世界の発達を促していた電子機器の類は、磁気嵐の影響で一度全て滅んだ。
かつて大地を覆っていた緑は、約一〇パーセントにまで群生率を低下させた。
かつては――
少年は「かつての世界の形」を知らない。知っているのは、砂漠と化した今だけ。
遮る物も、者も。汚すものも何もない空。
そんな空を見上げるのが、少年の日課だった。
今年で八歳を迎えたばかりの身体には重労働ではあるが、近くの廃墟からジャンク品回収の仕事を終えたあと、冷え込む前の砂原に寝転んで星を眺める。
防塵防湿のモッズコートから覗く手はジャンク品で傷つき、かさぶただらけ。毎日それを繰り返しているせいで至る所がガサガサになり、高質化している。デザートブーツは擦り切れてボロボロ。
頼るべき家族がいない訳ではない。
両親と姉は先の戦争で殉職したが、祖父がいる。
それでも少年が廃墟に通い詰めるのは、それが自分に課した存在理由だからだ。
廃墟からほど近いところに少年が生活の拠点としているオアシスがある。
そこで暮らす人々は、それぞれが何かしらの仕事をし、衣食をまかなっている。今は何においてもあまり裕福とは言えないから、子供といえども労働力として動かなければならない。それでもできる事は限られているが。
ただ、オアシスにはたった一つだけ掟がある。
『働かざる者食うべからず』

生きるという事。
助け合うという事。
そうしなければ周りが苦労をする。
なにより少年は、もう何も失いたくなかった。
両親と姉は死んだ。家も失った。唯一の肉親である祖母は、自分のせいで左腕を失った。
そうして生き延び、辿り着いたオアシスで生活を送ることにおいて、今まで
と同じままでは何も変わらない。無力でいてはならない。
幸い、ジャンク品はオアシスを防衛するために必要となる。多くあって困る事はない。間接的ではあるが、少年がジャンク品を集めるということはオアシスを守ることにもなるのだ。
だから、いくら自分が傷だらけになったとしても、苦しい思いをしたとしても、これだけは貫き通さなくてはならない。
守る。
それが、少年が自分に課した存在意義。
ちかり、と星が流れた。
少年は慌てて身体を起こして祈る。願わくば、明日も何事もない事を。
しかし何かおかしい。
たまに見かける流れ星は瞬く間に流れ消えてしまうのだが、今日のものは一向に消える気配がない。薄暗い空に光の尾を残し、落ち続けている。しかも心なしかこちらに向かって来ているような気さえする。
じりじりと後ずさりながら、そんなことは有り得ないと少年は自分に言い聞かせるが、数瞬あとにはそれが間違いだったと認識し、白熱する光の塊が間違いなくこちらに向かって来ていると判断できた時にはもう手遅れだった。
轟音。
光の塊が砂に突っ込んだのだ。あわや大激突というところで咄嗟に横に跳んだ少年は、砂まみれになりながら地面を転がった。
砂を少し吸い込んでしまったらしい。少年は咳き込みながら身体を起こし、墜落した光の塊に視線を向けた。
傷だらけの菱形流線型の物体。
全長は五メートル程。
見た事のない形状だった。
しかし、乗り物の類だと判断するに難くない。物体の一部がスライドしてい

http://grimreaper.is-mine.net/

てコクピットのようなものが視認できる。併せて、物体と同色の白を纏ったパイロットと思しき人間が近くに横たわっているのが見えた。

頭部の装備は墜落の衝撃で吹き飛んでしまったのだろうか。綺麗な黒髪の女性だった。

その女性は、よく似ていた。

少年が大好きだった姉の顔に、よく似ていた。

http://grimreaper.is-mine.net/

# 二、砂二埋モレタ国

「お買い上げ、ありがとうございました。帰り道、気をつけて」
ようやく手に入った。
日稼ぎの、決して多くはない収入から貯蓄を捻出し、四年近くかけてようやく手が届いた。
店主の声を背に受けながら、店から出てきたばかりの少年・鋼介（こうすけ）は、麻袋の中をのぞき込んでにんまりと笑った。
黒い鉱石。
薄汚れて傷だらけで煤だらけの、石ころ。
こんなモノが何故高価なのか、鋼介は知る由もないのだが、とにかくようやく手に入った。それと同時に、思う。——今年こそは間に合ったのだと。
あとはキャンプへ戻って加工をするだけ。それに必要な工具といえば、祖母が使っている物を借りればいいから、これ以上の出費は心配いらない。
ぶわり、と。
街中を風が通り抜けた。砂を巻き上げて通過していくその風は、乾期特有の乾いたそれ。もともと周囲は砂漠だから風が乾いているのは当たり前なのだが、今時期の風はそれに輪をかけてからからになっている。
鋼介は麻袋の紐を閉じながら上に視線を向ける。
塔。
無骨で巨大な鉄の塔。
ランドマークであるその塔は、今から約百年ほど前に作られた、前世期の遺物であることを、鋼介はキャンプで開かれる青空教室で知った。
塔のてっぺんで、旗が二つ、はたたいている。
一つは国旗。白地の布の真ん中に真っ赤な円が。
一つは県旗。布の中心に氷の結晶のような図形が。
つまるところ、ここは、日本国・東京都なのだった。
上げていた視線を街に下ろす鋼介。見える街並みは、テントや鉄骨がむき出しの建造物が多い。しかしこれでも、東京は未だに日本の中心だった。
過去に起きた大規模な磁気嵐の影響で電子は一度死に絶え、気候の混沌に伴って周囲は砂漠と化し——しかしそれでも、東京は未だに日本の首都だった。
ぶわり、と。再び風が。

http://grimreaper.is-mine.net/

鋼介は首からぶら下げていたゴーグルを付け、コートのフードを被って街の出口へ向かう。
鋼介は、砂漠になる前の世界の形を知らない。
しかし、知っている。
環境が荒廃したのと、街が荒廃したのは、時間軸が時代が違う。そもそもの理由が違うということを。
大規模な太陽フレアの放出。それが環境荒廃の原因であるならば、街の荒廃は、戦争が原因だった。
父と母と、大好だった姉を失った、あの戦争は未だ続いている。
現状。渦中。真っ只中。
敵の攻撃が始まった時に鳴るサイレンを、今日はまだ聞いていない。無骨な鉄塔が叫ぶ警鐘は緊急避難の合図。願わくば、今日は鳴らないことを――この大事な日にだけは、鳴らないことを。
足早に街を出た鋼介は、近くに停めていた車輪のないバイクにまたがって、その場を後にした。

＊

「――い。――――おい。――――蒼衣（あおい）！」
名を呼ばれ、飛んでいた意識が戻って、はっとなる。
「これ、聞いておったか？　終わりだよ」
つなぎ服を着た（といっても上半身はTシャツで、袖を腰でしばっている）隻腕初老の女性が、前髪を掻き上げながら言う。
「寝てたのかい？」
「……ああ、すまない」
「生返事とは随分だね小娘。しゃきっとせい」
ぺしり、と額を叩かれ、夢うつつというか、いまいち定まらなかった意識のピントがようやく合いだす。
「名前を言ってごらん」
「漆原蒼衣（うるしばらあおい）」
「歳は？」

http://grimreaper.is-mine.net/

「二十六」

「何かおもしろいことを言ってみな」

「隣の客はよく柿食う客だが、しかしどうだろう。客というくらいだからどこかの店の中でのことなのだろうけど、柿を置いている店というのは、私は寡聞にして知らない。しかも『よく柿食う』ということは少なくとも、少なくともそう思えるだけの量はすでに食べているわけで、仮に大量に柿を仕入れてある店があったとして、恐らくたぶん、それほどまでに柿を食う客なんてその人くらいしかいないだろうと思う。思うし、そこまで食べるのなら柿が好きなのだろうとも思うのだが、好きだからといってそこまで食べられるかと聞かれれば、私は首を縦には振れない。ともすればその客は、よく柿食う客、というよりは、柿の魅力に憑りつかれた客――――柿に喰われた客と解釈するのが正しいのだろう」

「……ふむ。正常だね」

「正常か」

「長い上につまらない。この事実が、お前さんを正常だと言いせしめてるよ」

「ありがとう、綾乃(あやの)さん」

「いや、礼を言われる流れではなかったよ」

淡々と、のらりくらりとやり取りを終わらせて、蒼衣はベッドから起きた。右目に鈍い痛みが走ったが、いつものことだった。

ここは砂漠のオアシスにあるキャンプ。その中でも一際大きなテント。医療テントの中だ。

「それで、綾乃さん。結果は？」

問うと綾乃は、後ろを向いて周辺に散らかっている道具を片付けながら簡単に応える。

「だから、言っているじゃないかい。正常だ、とね」

「そうか……！　そう、か……」

「おや、嬉しくないのかい？」

「……意地悪だな、綾乃さんは」

年の功さね、と綾乃は言う。

「お前さんの右目は治らないが、他の怪我についてはほぼ完治しているよ。四年間、よく頑張ったね」

右目網膜剥離。

全身複雑骨折。

http://grimreaper.is-mine.net/

それに伴った神経の一部損傷。
全部が全部、元に戻ったわけではないが、足りない部分はリハビリテーションでなんとか補っている。塞がった右の視界は、最初こそ遠近感は掴めなかったが、残った左目でカバーリングできるようになった。
歩くことができる。走ることができる。
考えることも、笑い、悲しむことも。
「奇跡的だとも思うよ。あんな状態から、四年でここまで回復するなんてね」
これも、〈ドラゴン・フライ〉の成せる業か。と綾乃は呟く。自嘲気味に。嘆息交じりに。
「まさかここまでの完成度とは……ドラゴン・フライ。これが、最終兵器が最終兵器たる所以というやつか。いやはや、まったくどうして。私のところに辿り着くなんてねぇ。これも因果かね」
ドラゴン・フライ。
かつて、そう呼ばれていた人間がいた。
正確には、プロジェクト・ドラゴン・フライ。
「蒼衣……すまないね」
「？　なぜ綾乃さんが謝る」
「背負わせてしまったこと。お前さんに背負わせてしまったこと。……前にも話したね。私は昔、プロジェクトの技術者だった」
言い訳になってしまうけれど。と綾乃は続ける。
「今がこんなじゃなければ、お前さんは、こんなに辛い思いなんてしなかったんだ。たぶん、おそらく、もしかしたら、もっと違う人生を送れていたかもしれなかったんだ」
私は。
綾乃は言う。
「蒼衣。お前さんの人生を、滅茶苦茶にしてしまったんだ」
蒼衣のところから綾乃の顔は見えない。背中だけ。齢四十を過ぎても若々しい後ろ姿。その背中からは、心なしか寂しげな雰囲気が漂っていた。
「……綾乃さん。明日、発つよ」
「分かっちゃいたが、急だねぇ」
「すまない。しかし、もとよりそういう約束だった。これ以上、綾乃さんたちに迷惑はかけられない」
怪我が治ったら出ていく。

http://grimreaper.is-mine.net/

それが、蒼衣が綾乃と交わした約束だった。
ベッドから降りる蒼衣。デザートブーツを履いていると、テントの入り口が開き、目の前を少年が走り抜けていった。少年は走り抜けざま、
「ただいま！　ばーちゃん、工具借りてもいい!?」
綾乃の孫、鋼介である。
「使ってもいいけど、怪我するんじゃないよ」
「ありがとう！」
どこかに出かけていたらしい。それについてとやかく言及する綾乃ではないが、しかし、心配事もあるにはある。
「あれも十二にもなれば一端の男さ。でも、あいつにも、ちゃんと言わなきゃならないよ？　蒼衣」
「……ああ、分かっているよ」
怪我は、ほぼ治っている。
だが、何かが痛い。どこかが重い。右目ではないどこかが。
四年前には、感じたこともない感覚。けれど、どこか懐かしい感覚。

http://grimreaper.is-mine.net/

# 三、漆原蒼衣

少しだけ、昔の話をしようと思う。
私は、元は漆原蒼衣ではなかった。
私は、四年前までただの軍人だった。
太陽フレアの影響で発現することとなった新金属〈ヒヒイロガネ〉。灼熱を思わせる紅蓮のそれを用いて製造された希望――〈MADO／frame - first〉。超高速で空を飛びまわり、単機にて戦況を覆すその戦闘兵器のパイロットだった。
MADO は特殊な戦闘兵器。扱うには、相応の資格がいる。
プロジェクト・ドラゴン・フライ、という計画があった。
その詳細は、ヒトがヒト非ざるところへ到達するためのプログラムカリキュラム。平たく言えば、強化人間の創造である。
それを施術された人間が戦闘兵器への搭乗を許される。私は、その中の一人だった。
ナンバー7、ブラン・エフェメラル。それが私に与えられた名前だ。
ドラゴン・フライの任務は、基本的にはヒヒイロガネの回収と、敵機の迎撃――敵国との戦闘である。覚えている限りの話で言えば、私が、私たちが投下された戦闘に敗北はない。なかったはずである。
そんな中でも攻略困難な任務もあって――というのはまた別の話。
ともかく、私はドラゴン・フライの一員だった。
そう、「だった」。
ドラゴン・フライは、誰でもなれる訳ではない。MADO に搭乗できるのが強化人間だけであるように、ドラゴン・フライになれる人間にも、それ相応の資格がいる。
始めに少しだけ詳細を開示すれば、そこにあるのは、人体実験という非人道行為。
投薬。
テスタメント。
強度検査。
人間にそんなことを施すのは、法律に触れる。戦争中という非常事態の真っただ中ではあるが、法律は生きていた。ただ、それが適用されるのは、あくまで普通の人間。事実上、戸籍のある人間だけ。捨てられた人間はそもそも人間

http://grimreaper.is-mine.net/

ですらない。
つまるところ、私は、捨て子なのだった。
仲間と呼べるか定かではないが、同時期にプロジェクトの施設に入所させられた人間は大勢いた。しかし残ったのは、私を入れてたったの二人だった。
屍を越えるということを体感した。
他人よりも優れているということを実感した。
しかし、それだけだった。
私の代のプロジェクト技術者に綾乃さんはいなかったが、担当者は私に言った。「お前に理由を与えてやろう」と。
理由。
存在意義。
目的をくれてやると言った。
敵を倒すという、単純明快な――相手を打ちのめすための言い訳を。
最初はそれに従っていた。何せ、初めて手に入れた存在意義だ。嬉しい、とまではいかないが、失うのが怖かったのかもしれない。
だが、一つの転機があった。
雪が降りしきる真冬の任務だった。
たしか、ロシアからの侵略だったと思う。戦況はこちらが優勢。あとは残党を殲滅して任務は終わりのはずだった。破壊し損ねた敵の機体が、近くに居合わせた民間人を殺したのだ。
その民間人は、親子だった。
まだ若い母親と、年端もいかない少女。
雪に足を取られ、転んだ少女がまず始めに攻撃の対象となった。それを守らんと子供に覆い被さる母親。無情にも、生身の人ひとりで受け止めきれる火力では、なかったというのに。
断末魔さえなかった。
彼女たちが生きた痕跡すら、残らなかった。
私は、直後には絶叫していた。何故なのかは分からない。しかし、胸の奥底から込み上げるような、押し寄せるような何かを感じた瞬間、叫ばずにはいられなかったのだ。
熱い。
熱い何か。
それから私は、考えるようになった。

http://grimreaper.is-mine.net/

あの母親は、子供の盾になるという役目を誰かに与えられたのだろうか、と。
ああなる事を理由づけられていたのだろうか、と。
それならば私と同じはずだと。
……分からない。そうであるならば、あのとき感じた熱の正体は一体。あの母親が私と同じであるならば、私は――思うところなんて、何かを感じる事なんてないはずじゃないか。
それから私は、軍を飛び出した。
知りたくて。
ただ知りたくて。
理由の、目的の、存在意義の根幹にある物の正体を。
――そして四年前の、あの夜に繋がる。
軍を抜けた私を排除するために寄越された人型機体、〈MADO／frame-next〉。
私が駆る機体の正統後続機シリーズであるそれ。つまるところの後輩に、私は迎撃された。
奴は言った。「あんたらの伝説は、すでに過去なんだよ」と。
正論だと思う。与えられた存在意義を示すこともできず、勝手な思考で、衝動的に独断に踏み切った。
それでも、私は生きている。
墜落時、近くにいた少年に助けられた。あれから四年もの歳月が経っているが、私が生きているということが知れたとしたら、奴は、軍は、間違いなく私を消しに来るだろう。
そうなる前に、私はここを去らなくてはならない。
綾乃さんは、キャンプに残れと言ってくれる。
しかし、駄目なのだ。
恩人たる人たちを危険にさらしてしまう行為だけは、やってはならない。どうあっても死ぬべきなのは、私一人なのだから。

http://grimreaper.is-mine.net/

# 四、漆原鋼介

僕が持っている大切なものの話を、しようと思います。

長くはなりません。だって僕が持っている大切なものは、決して多くはないのだから。

指折り数えられる程度です。両手はいりません。片手で事足ります。事足りてしまいます。

だから。

指折り数えられる大切なものが、僕の全てです。全てと言って、過言ではありません。

僕には、祖母がいます。

祖母は昔、軍の開発部にいました。国を守るための機械を作っていたのです。名称は、たしか――MADO。

しかしこの機械、どうやら普通の人は乗ることができないようで、選ばれた特別な人しか乗れないのだそうです。なんて話を聞くと、乗ってみたくなるのが子供心といいますか、男心といいますか。

僕らが住むキャンプ地には、実は秘密の地下室があって、そこにはいろんな設計図と、全長十メートルくらいの人型ロボットがあることを僕は知っています。乗りました。乗り込みました。子供心といいますか、男心といいますか。いわゆる、好奇心というやつに駆り立てられ、僕はそのロボットに搭乗したのです。

コクピットは子供の僕にしてみれば広く、いろんなボタンが付いているのかと思いきや、そんなことは全くなく、せいぜい十個未満といったところでしょうか。代わりと言うにはあれですが、モニタがたくさん付いていて、僕はまたまた好奇心で電源らしきスイッチを押してしまいました。

起動シーケンス、という機械音声のアナウンスが聞こえた直後、操縦桿と思しき物が二本、飛び出してきて、座席の後ろから大量のケーブルが伸びてきました。

接続を確立できません。マニュアルドライブで操作を開始しますか？

機械音声は、僕にそう質問してきました。

僕は頷いてモニタに表示されたＹＥＳを押しました。

そのすぐあとだったと思います。

http://grimreaper.is-mine.net/

いつもは優しい祖母が、鬼の形相でこちらに向かってきているではありませんか。ウェーブのかかった髪も助けて、その形相は鬼婆のようでした。

怒られました。

今世紀最大の怒りといっても過言ではありません。いや、過言かもしれません。

でも僕は、あんなに怒った祖母を未だかつて見たことがなかったのです。それと同時に、祖母の言葉が気になりました。――お前には、適性はあるが今はその時ではない、と。

祖母がどんな意味で言ったのか。僕にはわかりません。

ただ、ロボットの胸部に空いた、人為的な穴の存在が、関係しているようにも思えました。

祖母は、僕を叱る時は右手でげんこつをします。

左腕はありません。

祖母の左腕は、ロボットの起動時になくなりました。

強制ダウン、と。祖母はたしかそのようなことを言っていました。詳細はわかりませんが、ロボットの活動を無理やり休止させるためのコマンドです。無理やり、というくらいですから、普通の方法ではありません。代償に、祖母は腕を失いました。

僕のせいです。

僕のせいで祖母は、利き腕をなくしました。

オアシスキャンプの要であるエンジニアの命ともいえる腕を、失ったのです。

服のボタンが掛けづらい――僕のせいです。

箸がうまく使えない――僕のせいです。

好きな仕事が、できない。

――僕の、せいです。

僕は、腕だけでなく、祖母の人生すらも奪ってしまったのです。

それでも祖母は、僕に優しくしてくれます。憎いはずなのに。憎くて憎くて、しかたがないはずなのに。

だから僕は誓ったのです。

守る、と。祖母のこれからは、僕が守るのだと。

その数か月後でした。

僕はいつも通り、廃墟に潜ってジャンク品を漁っていました。その日は少し潜りすぎてしまいまして、地上に戻った時には日も暮れ、空はとっぷりと夜に

http://grimreaper.is-mine.net/

浸っていました。

流れ星かと思いました。

白く光る何かが空を横切ったのです。でも、途中でそれが星でないことに気付きました。だって、こっちに向かってきているのですから。僕は全力で横に跳びました。ぎりぎりだったと思います。遅れて到来した烈風に巻き込まれ、僕は砂丘を転がりました。

平衡感覚を取り戻すのに少し時間がかかりましたが、僕は、砂漠につっこんだ物の正体を確かめるために、すぐに現場に向かいました。

砂漠につっこんだ物がもしも敵国の機械だったりしたら、事ですから。

でも、結果的には違ったのです。

墜落現場を見るとそこには菱形流線形の白い何かが電光をまき散らしながらその機体を横たえているではありませんか。さらにその機体の一部がスライドしていて、乗り込んでいた人が外に投げ出されていました。

そのとき僕は、目を疑いました。

だってそこに横たわっている人は、よく似ていたのです。大好きだった姉の顔によく似ていたのです。

僕は、戦争で父と母と、大好きだった姉を失いました。

父よりも母よりも、なによりも大好きだった姉――蒼衣姉ちゃんによく似た人を見つけた瞬間、僕は、泣いてしまっていました。姉の名を、叫んでいました。

蒼衣姉ちゃんによく似たその人は、右目から血を流していました。身体のあちらこちらがズタボロになっていました。僕が叫んでいたのは、もしかしたら、また蒼衣姉ちゃんを失うかもしれないと思ったからなのかもしれません。

とにかく僕は、蒼衣姉ちゃんによく似たその人を、キャンプまで連れて行ったのです。

これが四年前の話です。

僕は最近誕生日をむかえ、十二になりました。

日本における成人とみなされる年齢は二十だったようですが、そのルールはだいぶ前に廃れてしまったようで、誕生日当日に祖母からお酒をいただきました。すごくまずかったです。

蒼衣姉ちゃんが生きていたら、十四歳になります。

僕が助けたその人は、少し大人びていましたから年齢までは一緒とはいかないのでしょうけれど、でも、似ているものは似ているのです。瓜二つです。三

http://grimreaper.is-mine.net/

つかもしれません。
そして偶然にも、僕がその人を助けた日というのは、蒼衣姉ちゃんの誕生日だったのです。
なおさら。
ことさら。
ともすれば、何か暗示のようなものを感じても、おかしくないじゃないですか。
キャンプに連れ帰ってから、その人は、すぐに目を覚ましました。
僕は、名前を聞きました。
好きに呼んだらいいと、その人は言いました。
影を重ねるのはよくないことです。だって、その人はその人ですから。その人という個人ですから。
でも、それでも。
僕はその人を、漆原蒼衣と——蒼衣姉ちゃんと呼ぶ他なかったのです。
そして今日、こんにち。蒼衣姉ちゃんは誕生日を迎えます。今年は間に合いました。
何がって？　それは当然、プレゼントですよ。あとは加工するだけ。
ともかく、これが、僕が持っている大事なものの話です。

http://grimreaper.is-mine.net/

# 五、黒光

【ヒヒイロガネの反応あり】
【ポイントデータを取得しますか？】

取得中＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【パイロット、データを更新。座標をセットしました】
【これよりオートドライブモードに移行します】

＊＊＊＊＊＊＊＊＊移行は正常に完了しました。

【二分後に到着します】

＊

医療テントの隣。ビルの廃墟を利用して作られた簡易工場から聞こえてくる金属音が鳴りやんだ。鋼介が作業を終えたらしい。祖母の綾乃から借りた工具と目的の物を持って工場から出てくる。

顔が煤だらけになっていた。

石を加工するのは初めてではないから、それほど苦労はしないと思っていたが、あの高価な石ころは強度が違った。まず、馬鹿みたいに火力を上げないと形状を変えることができない。そのくせ、中途半端な温度で叩くと欠けてしまうのだ。

実際、鋼介は石ころの半分くらいを砕いてしまった。

結果的に完成はしたからよかったのだが、思っていた大きさにはできなかったのが心残りだった。

しかしこの石ころ。不思議なことに、熱せれば熱すほど、赤く赤く、赤みを増す。それが冷えても色は消えない。

ルビーに似ていた。だが、そこまで透き通ってもいなかった。

http://grimreaper.is-mine.net/

石や鉱石にはあまり詳しくないから専門的なことは言えないが、綺麗ではなかった。
光沢のない赤。
――うん、でも、気持ちだよね。プレゼントは。
そうやって思い直す鋼介。あとは今日誕生日を迎える蒼衣を探して、渡して、祝って。
楽しいことはたくさんある。それがたとえ戦争中だったとしても。しかし鋼介の思いは、直後に走った激震によって、打ち砕かれた。
砂が舞う。
地面が揺れる。
大地が悲鳴を上げる。
駆け抜けた衝撃で転倒した鋼介は、地面に這いつくばった状態から身体をひっくり返して周囲の状況を確かめた。
漂う砂煙。
しかし見える。
黒銀が。黒銀に輝く人型機体が、そこに佇んでいるのが見える。
詳しい兵装を確認することはできないが、しかし、さきほどの衝撃はこの機体が着地することによって起こしたものだという事は瞬時に理解できた。そして鋼介は、この機体を知っていた。キャンプの地下にある秘密の空間にあった機体とは形状が別ではあるが、それと一緒に保管されていた設計図で見たことがある。
〈MADO／frame - next〉。
現・日本軍が有する最強の戦闘兵器。
敵の脅威を撃ち滅ぼすはずの機械が、なぜこんなところに。
逡巡していると黒銀の機体から声が。
『協力を要請する。素直に応じれば、手荒な真似はしねえ』
声が続く。
『ここにあるはずなんだがなぁ……赤くて赤くて赤い石なんだが』
赤くて赤くて赤い石。
鋼介は無意識に右手へ視線を落とした。
――……この石が、目的……？
『ヒヒイロガネっっってな。敵国も狙ってるってんで、保護対象物に指定されてる危ない鉱石だ。未加工段階だと煤だらけで反応が鈍くてな――さっき反応

http://grimreaper.is-mine.net/

は出たばっかりだから、誰か加工したやつがいると思うわけなんだよ』

秘匿は罪だぜ？　と機体の声は言う。

そんな事は知らなかったでは済まされない。聞いてしまったからには、事情を聞いてしまったからには。

しかし鋼介は迷う。四年もかけてようやく渡すことができるかもしれないプレゼントを、危険だからといって手放すのか。それとも大切な人を危険な目に合わせないために、右手にある物を差し出すのか。

守る。

それが、鋼介が自分に課した存在意義である。ならば、大切な人を危険にさらす行為というのは――――。

「鋼介！」

言いよどんでいると後ろから声。振り返ると蒼衣が医療テントから飛び出してきていた。その後ろからは祖母・綾乃が。

二人の姿に気付いた黒銀機体が、驚いたように声を上げた。

『……生きていたのか』

その言葉は蒼衣に向けられたものなのか、綾乃へ向けられたものなのか。

否。

その両方。

『MADOの全容を持って行方を眩ませていたプロジェクトの責任者・漆原綾乃。機体を持ち逃げて死んだはずの先代、ブラン・エフェメラル……おいおいおい。こりゃ、どういうこったい。国際指名手配級の犯罪者が、揃いも揃ってこんなとこにいるなんてよ。こいつはどうやら、ヒヒイロガネどうこうの話じゃなくなってきたな』

ドラゴン・フライ及びMADO開発の全責任者、漆原綾乃。

脱軍の逃亡者、漆原蒼衣。

二人は軍に所属していた。所属していながら、その技術の粋を外に持ち出した。

開発の責任者であった綾乃は、たとえば敵国に拿捕された場合、知りうる技術を開示しなければならない状況に追い込まれる危険がある。

逃亡者の漆原蒼衣は、持ち出した機体ごと捕獲された場合、戦力の解析をされる危険がある。

どちらがどちらも、軍の都合。国の都合である。個人の危険は考慮されていない。しかし、それが国のためだった。

http://grimreaper.is-mine.net/

でも。
それでも。
――あんまりじゃないか……！
鋼介は身体を起こしながら拳を握って身体を震わせる。
理屈は分かる。理由は分かる。
だけれど。ならば。
人ごときが人に与えるなよと鋼介は思う。
それに、言ってしまえばこの事態は、自分が作り出してしまったと言っても過言ではない。やっとの思いで購入した石が、ヒヒイロガネだと知らなかったとしても、この状況は鋼介が原因で起こってしまった。だったらやる事は決まっている。責任の取り方は、決まっている。
「おい、お前！」
鋼介は黒銀機体に向かって言う。
「お前の目的はヒヒイロガネなんだろ！　だったら持って行けよ。僕が、僕が持ってるから！　ばーちゃんと蒼衣姉ちゃんは関係なくはないんだろうけど、でも、そんなの、後付けの理由じゃないか！　見落としてたのはお前だ！　それを、思い出したように蒸し返して、後付けて――――」
途切れる鋼介の声。
黒銀機体の左腕が軽く振るわれ、捉えられた鋼介の身体が吹き飛んだ。小さな体は砂上を転がり、テントに突っ込んでようやく動きを止めた。
蒼衣の位置から、見える。
ぐしゃぐしゃにひしゃげたテントの骨組みの上で横たわる鋼介が。ぴくりとも動かない、義弟の身体が。
フラッシュバックする。
数年前の。任務の。
雪が降りしきる景色。母娘。
「――――」
瞬間、蒼衣は、胸の奥底からこみ上げてくるの感じた。そして同時に、
「――来い！　ブラン!!」
自分の手足とも言える機体名を叫んだ。
直後に空に響き渡る甲高い音――動力音。エンジンが出す打ちつけるような鼓動ではない。伸び続ける甲高い絶叫。光の羽が空気を切り裂く時にまき散らす飛行音。

http://grimreaper.is-mine.net/

爆風と共に現れる光沢のない白。
傷一つない機体は、スライドしてコクピットを開け広げた。

http://grimreaper.is-mine.net/

# 六、存在意義

【接続を確立】
【神経系のコネクトは問題なく完了しました】
【兵装ユニットのオートメーション機能を、】

いい。

【マニュアルにしますか？】

寄越せ。私に。全部を。

【マニュアルモードに移行しました】
【有視界飛行状態です】
【全システム・起動を確認しました。機体ブラン・エフェメラルはこれより、パイロット、ブラン・エフェメラルに主体思考を全任し――漆原蒼衣に全任し――】

……ブラン。

【――補助演算に徹します】

ありがとう。

＊

夕闇が迫る空を、二つの光が駆け抜ける。
一つは白。菱形流線形の機体ブラン・エフェメラル。
もう一つは黒。人型機体オニキス・ライト。
オニキス・ライトはブラン・エフェメラルの正当後続機シリーズである。有

http://grimreaper.is-mine.net/

する単騎のスペックは先代の能力を基礎に、大幅に底上げされている。
しかし、この二機を比べた時、違う点が更にいくつかある。
その中の一つ。パイロットが持つ感情。
初代機ブラン・エフェメラルは、パイロットの神経系を直接機体に接続して稼働するため、感情（よけいなもの）は取り払われていた。感情を持たないパイロットの育成を要していた。
恐怖は動きを鈍らせる。
喜びは決断力を鈍らせる。
対する後続機オニキス・ライトは、感情の制御こそなかれ、逆に〈戦闘意欲〉を投薬によって植え付けられているのである。
戦闘意欲は痛みをねじ伏せる。
戦闘意欲は恐怖を叩き潰す。
どちらも非人道的であることは、変わりないが。
オニキス・ライトの兵装、ランチャーからクラスターミサイルが射出され、空中で分離して連鎖爆発を巻き起こす。
——遅い……！
空が赤に染まる。
爆発が爆発を塗りつぶし、際限なく肥大化していく。
——まだだ……！　まだ、上がる！
その隙間を、爆風と爆風の縫い目を、境目を、蒼衣は飛び続ける。
左目が得る視覚的情報は、ブラン・エフェメラルの機体に張り巡らされた複数のカメラ・アイから流れてくるデータのおかげで全方位に至る。
しかし左目。片目だけともなると、視認はできても動きまでの総合判断は必然的に遅れが生じてしまう。右目はもう見えない。右目があったら、と考えてはいけない。これが今の自分だと受け入れろ。そのうえで上回れ。相手を。速度を。全てを。
——もっとだ……！
この程度ではないはずだと蒼衣は歯を食いしばる。
最速の機体ブラン・エフェメラル。
まだ体現できてはいない。いなかった。辿り着いていなかった。機体コンセプトに。与えられたその名の、存在意義に。
次いで殺到するクラスターミサイルの嵐。
オニキス・ライトの主兵装は銃火器。この程度の物量で底をつくはずがなく、

http://grimreaper.is-mine.net/

底をつくわけもなく。たしか副兵装のダスターで空気中の塵を集めて弾丸を精製できるから、遠距離戦に持ち込まれては勝ち目はなかった。
元より、ブラン・エフェメラルの間合いは超近接。翼として稼働しているフォトン翼で相手を切り裂けるまでのレンジに入るしか勝機はない。
――もっと、もっと……まだ、足りない！
中距離の副兵装――小型電磁加速ユニットによるレールガンという手段もあるが、これは牽制的な意味でしか使えない。弾も少ない。
それでも。
――飛び、続けろ!!
悔しい。
追いつけないことが、悔しい。
率直に、蒼衣はそう思った。
それは、ずっと昔に捨てたはずの感情だった。
ドラゴン・フライになる際、いらないからと捨てた余計なものだった。
不意に、全方位を捉えている視界の中に何かが映った。それは地上から空へ向かって高速で伸びる煙。飛行機雲にも似た真っ白な煙。
突如として入る通信に、蒼衣は一拍遅れて応じた。
コクピット前面の左下に通信相手の映像が映し出される。
『――蒼衣姉ちゃん！』
「鋼介!?」
『横、見える!?』
言われて蒼衣は、全方位の視界の中に映る白い機体を発見する。黒銀ではない、白い人型機体を。コクピットには鋼介が乗り込んでいるらしい。しかしその全容が掴めない。
『姉ちゃん、聞いて』
コクピット前面左下に映し出される鋼介は、傷だらけだった。
『ブラン・エフェメラルは、単機じゃないんだ。二つあるんだ。二機で一対なんだよ！』
鋼介は言う。考えてもみろ、と。
人型機体ではないブラン・エフェメラル。しかしその正当後続機であるオニキス・ライトは、人型機体だった。正当後続機とは、なにも名だけの話ではない。名は体を表す。ならば、先代機であるブラン・エフェメラルにも、人型形状があると考えるのは至極真っ当なことではないか。

http://grimreaper.is-mine.net/

『――そうだよ、蒼衣！』

ヴン。と今度はコクピット前面左上に綾乃の顔が映し出される。

『ブラン・エフェメラルの代のシリーズは、全機体二機で一対。その理由は、感情にある。神経系を直接機体にぶち込むお前さんの乗り方は、下手をすれば機体の損傷とともにパイロットの死に直結する場合がある。その苦痛が少しでも軽減されるようにという配慮が根底にあるんだ。これがもしも感情があった場合、痛みはダイレクトさね。でもね、感情は、神経だよ。お前さんが嬉しければ、それは機体にちゃんと伝わる。お前さんが悲しければ、それもちゃんと機体に伝わる。お前さんが勝ちたいと思えば、伝わるのさ！』

そして、と綾乃は続ける。

『パイロットが二人。これは根性論で精神論なんだがね、二人の方が、強いに決まってんだろう？』

それが真意なのかどうかはともかくとして。

蒼衣は考える。感情というものを。

鋼介が殴り飛ばされたとき、胸の中に灼熱したものがこみ上げてきた。真っ赤なそれは――――怒り。

数年前、雪が降りしきる中で逃げ惑っていたあの母娘の死を見たとき、胸の中にこみ上げてきた青い熱は――悲しみ。

その他にも、いくつもあった。形容しがたい胸の中にわだかまる様々な色の熱。

蒼衣はその正体に辿り着く。そして同時に思う。存在意義とは何なのか。

思案しているとコクピット前面中心にウインドウがポップアップ。

SONIC モードに移行しますか？

押せば何かが変わるのかもしれない。踏み込めば、何かが変わるのかもしれない。

それは分からないけれど。

――私は、帰ってきた感情を、二度と捨てたりはしない。

蒼衣がＹＥＳを選択した瞬間、ブラン・エフェメラルの機体が鋼介の人型機体胸部に空いた穴に這入り込む。突き出たブラン・エフェメラルの機尾が四つに割れスライドして、隠れていたオーバードブースター総計八基がその姿を表した。

http://grimreaper.is-mine.net/

コクピットは二つ。
上部に蒼衣が。下部に鋼介。
接続の最中、敵機オニキス・ライトが再度放ったクラスターミサイルの嵐がブラン・エフェメラルに殺到するが、二人は合図なしで同時に操縦桿を倒した。
直後。
ブースターが灼熱。羽のように広がったフォトンが空気を弾き、機体が消えた。
今までの速度の比ではなかった。一足で音速を超え、衝撃波をまき散らしながら弾幕を潜り抜ける。
殺到するクラスターミサイルの弾頭。
――まだだ。
爆風のその刹那の。
――まだ上がる。
光が瞬くその一瞬を。
――まだ、行ける！
ブラン・エフェメラルは、蒼衣は、鋼介は、潜り抜ける。
そして体現する。到達する（誰も追いつくことのできない刹那）。機体コンセプトへ。白に与えられたその名の存在意義へ。ブラン・エフェメラルへ。
「――――ぉ、おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお‼」
「――――ぅあああああああああああああああああああああああ‼」
そして照準。
火力のすべてを躱しきったブラン・エフェメラルが相手の懐に潜り込んだ。
ここが領域。
――斬る。
自分が持つ刃以外の煌めき――オニキス・ブラックの最終兵装・フォトン刃が振るわれるが、もう届かない。八基のブーストを瞬時に爆発させたブラン・エフェメラルは、既に数十メートル後方で、静かに佇んでいた。
腕から伸びたフォトン刃を振り払う。
光の刃はそのあとすぐに形状を失い、淡く光って消えていった。

http://grimreaper.is-mine.net/

# 七、終章

おかえり、感情。

〈了〉